1．清間遺跡（せいまいせき）

所 在 地：あわら市清間 20 字中館 24 番ほか
調査原因：新工場建設に伴う調整池等付随設備造成
調査期間：令和２年 10 月５日～ 11 月 19 日
調査主体：あわら市教育委員会
調査面積：925 ㎡
時　　代：弥生時代、古代、中世

位置図（S＝1/50,000）

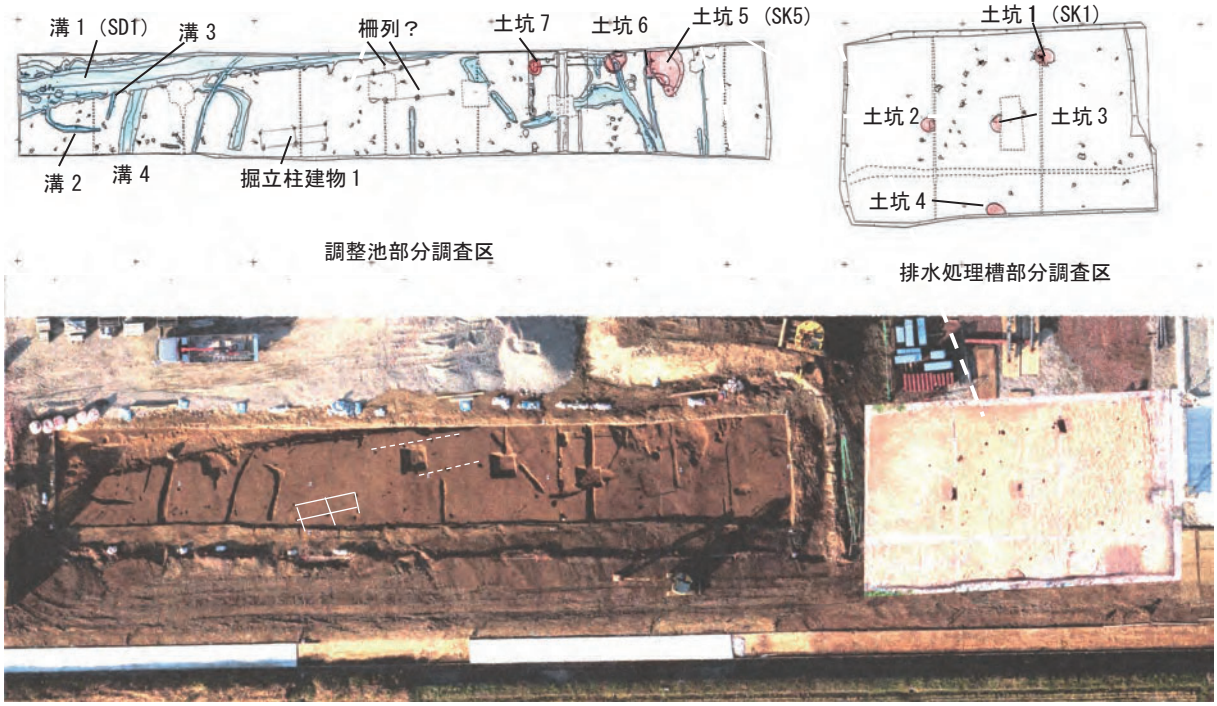
調査の概要　遺跡は、竹田川左岸の自然堤防上にあり、今回の調査地点は、新工場建設に伴い、令和元年度に実施した調査地に接する南西となります。東側の排水処理槽部分と西側の調整池部分で、工事開始時期が異なるため、２区に分けて調査を行いました。最終的な調査面積は、排水処理槽部分が東西約 29.8m、南北約 13.0mで計約 384 ㎡、調整池部分が東西約 63.0m、南北約 8.6mで計約 541 ㎡です。

遺構　排水処理槽部分から、土坑（ＳＫ）４基、柱穴・小穴（ＳＰ）34 基を確認しました。土坑（ＳＫ）１は径約 1.2mの円形で、西側半分のみ掘ったところ、確認した高さから約 0.5m下層で多数の土師質皿を重なった状態で検出しました。土師皿取り上げ後の深さ約 0.8mまでの掘削にとどまりましたが、中世の素掘り井戸と思われます。

調整池部分は、土坑６基、柱穴・小穴 116 基、溝（ＳＤ）22 条を検出しました。柱穴には、2 間×1 間の掘立柱建物１棟、柵列と思われるもの２列を含みます。東西方向からやや傾いた直線状の溝（ＳＤ）１は、上部幅約 2.0m、底部幅約 1.0m、深さ約 0.4mの古代の溝でした。屈曲する溝２は、北側が溝１に切断されて確認できないため、それよりも古い時期となります。排水処理槽に近い箇所で検出した土坑５・６は、重機での掘削時から炭混じりの黒色土に中世の土師質皿などが多数含まれていました。しかし、北側が調査区外となるため、全形は未確認で土坑の性格も明らかにできませんでした。

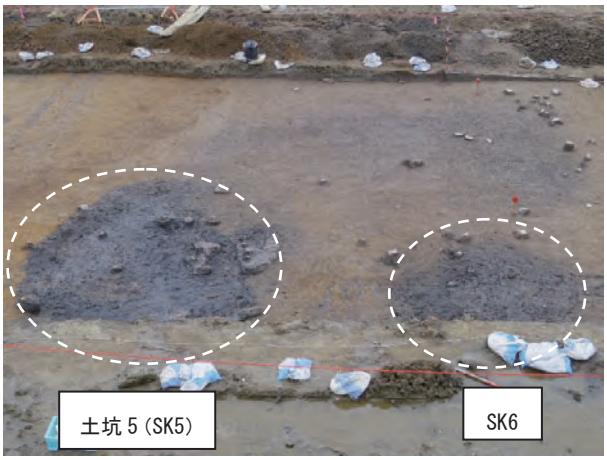
遺物　洗浄途中ですが、中世の土師質皿が大多数を占め、その殆どが土坑１・５・６から出土しています。溝１は、古代の須恵器の出土が多く、土師質土器、越前焼、弥生土器・石器、管状土錘等も少量含みます。特に注目すべき遺物に古代の墨書土器と製塩土器の一種と思われる土製支脚各１点があります。溝２では、北側肩部から弥生時代後期のほぼ完全な胴部に穿孔された壺形土器１点が横倒しの状態で出土しています。

まとめ　調査地は、井戸と考えられる土坑等から、中世に最も栄えていたようです。溝２出土の胴部穿孔の壺形土器は、煮炊きには使えず、墓や祭祀に伴うことが多いため、溝２は溝３とともに弥生時代後期の方形周溝墓の周溝の可能性があります。溝１に含まれていた遺物から、11 世紀には溝が使用されなくなって埋もれたと思われますが、以前には周辺に文字を知る人が居住し、塩づくりの最終工程が行われていた可能性も考えられます。（橋本幸久）

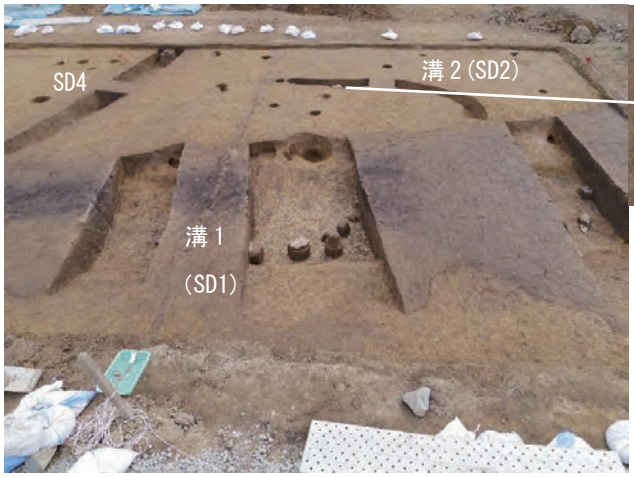


清間遺跡両調査区遺構図（上）、合成俯瞰全景（下：北方上空から）

土坑１西半部、土師質皿の検出状況（西方から）



調整池調査区土坑５・６検出状況（北方から）



調整池調査区西端溝１、一部掘削状況（北方から）

溝２北側肩部の胴部穿孔弥生壺形土器出土状況（西方から）

溝１遺物出土状況（西方から）